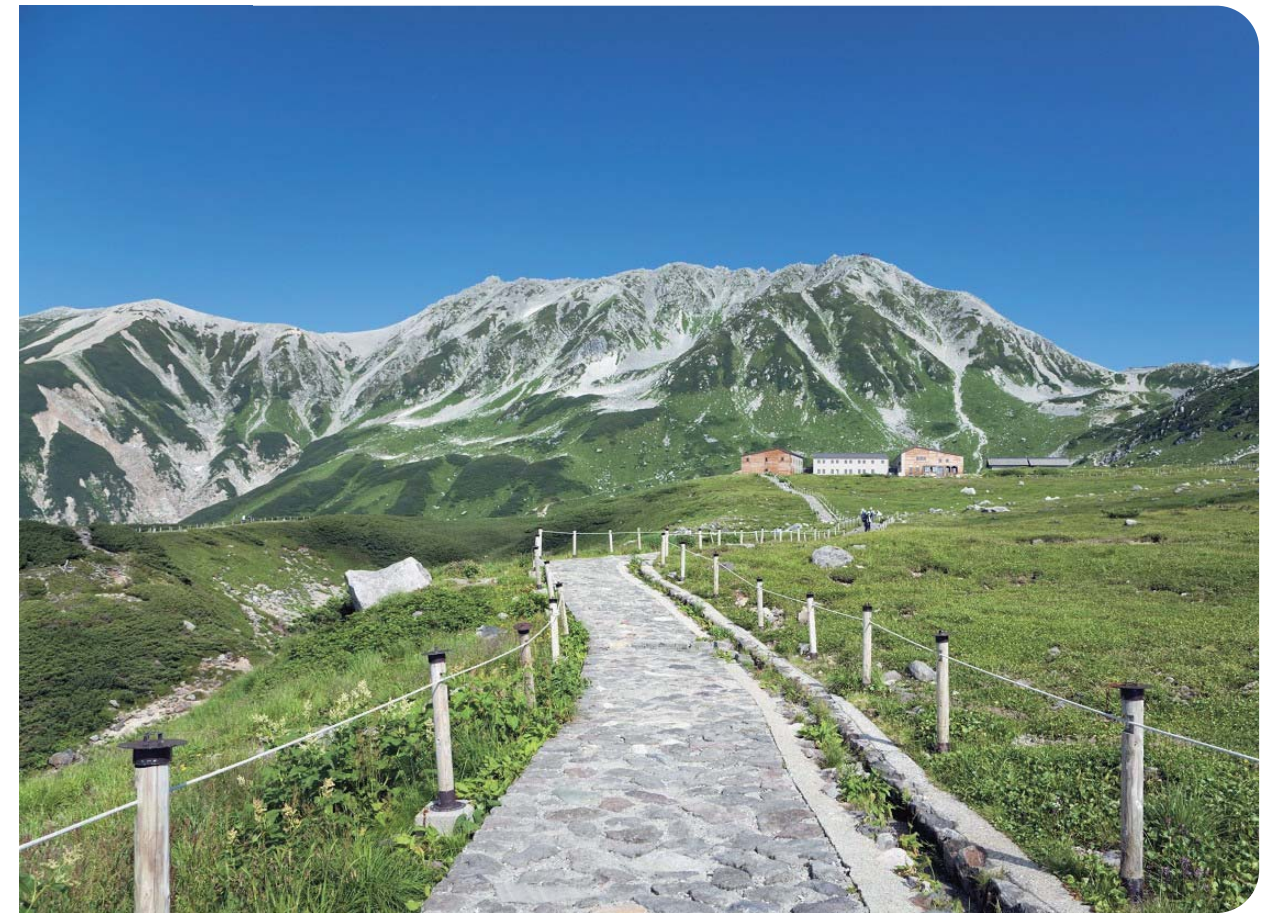


ノボケア Smile

笑顔を支えるインスリン療法

2010
夏
No.26



富山県 室堂の遊歩道

監修 岩本安彦 (東京女子医科大学糖尿病センター センター長)
編集協力 岩崎直子 内瀧安子 尾形真規子 北野滋彦 佐倉宏 佐藤麻子 佐中真由実 新城孝道 中神朋子 馬場園哲也
(東京女子医科大学糖尿病センター) アイウエオ順

ノボケア Smile
笑顔を支えるインスリン療法
No.26 Summer 2010

2010年9月発行 / 第1版第1刷発行 非売品
[発行]
ノボ ノルディスク ファーマ株式会社
〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-1-1 明治安田生命ビル
www.novonordisk.co.jp
[企画・制作]
電通サドラー・アンド・ヘネシー株式会社
〒104-8427 東京都中央区築地1-12-6 築地えとビル



1433790201 (2010年9月作成)

レッツ・フォーカス
糖尿病診断基準の改訂

ズームアップ インスリン
糖尿病と病診連携



糖尿病と病診連携

東京女子医科大学糖尿病センター
岩崎 直子

より多くの患者さんが必要な医療をできるだけ過不足なく受けられるよう、厚生労働省は病院と診療所の役割分担を明確にし、お互いに協力し合う「病診連携(病院と診療所の連携)」を進めています。病診連携は糖尿病の治療を続けていく上で、どのように関わってくるのでしょうか。

病診連携とは

意外と知られていないかもしれませんが、医療施設(病院や診療所)は三つに分けられており、それぞれに特徴を持った使命が与えられています。「かかりつけ医」・「家庭医(ホームドクター)」の先生方は地域住民の健康管理を担当しておられ、軽い症状の患者に対応して下さいます。このような診療所を一次医療機関と呼んでいます。一次医療機関では住民健診や予防接種なども担当されるので、患者さんの体調や暮らしぶりなどをよくご存じです。健康上の問題が発生したり、健診で「要治療」がみつかったら、まず診療所の先生に診て頂きます。必要な場合には、適切な「病院」に紹介して頂き、その後、診療所でまた十分管理できる状態になれば、再びかかりつけ医の先生のお世話になります。

二次医療機関は、一次医療機関で扱えないような病気や、手術が必要な患者さんに対応する市中病

院などの病院です。三次医療機関は、二次医療機関では対応できないような、より重篤な病気やけがのある方、診断が難しい患者さん、そこでしか提供できない特殊な検査や専門性の高い医療を必要とする患者さんを中心に診療します。多くの専門科を有する病院で国立病院や大学病院などの病院があてはまります。従って、当初の目的が果たされて治療方針も決まり、病状が安定すれば、一次または二次医療機関に逆紹介し、新たな患者さんを受け入れる準備をします。

このように「病院」と「診療所」がそれぞれの特性を活かし連携して、患者さんの治療にあたるのが「病診連携」なのです。

医師間の交流

病診連携では地域ごとに、病院と診療所が、それぞれの役割を分担して患者さんを診療します。そのため、近年では病院との診療所の密な連携ネットワーク作りが活発に行われています。たとえば、病院が中心となり、診療所の医師と定期的に会合を開き、治療法の紹介や具体的な事例を用いた討議などの勉強会を開いています。また、診療所の要望を参考に、講演会を催したり、医師同士が顔の見える場で情報交換を行って親交を深めています。このような交流を通じて、より迅速でスムーズに患者さんが「病院での検査や入院」をできるようにしています。医師間のネットワーク構築は糖尿病だけでなく、がん、脳卒中、心筋梗塞、大腿骨骨折の手術後、などでも進んでいます。

糖尿病の治療と病診連携

インスリン導入を含めて最適な治療方法を決定する、生活習慣改善などの指導を受ける、糖尿病食

を実際に食べて血糖の改善を実感する、合併症の評価を行う、などの目的で入院して退院後は地域の診療所へ移って治療を継続する。これも病診連携の在り方です。診療所ではできない眼や腎臓の合併症の検査や治療の部分だけを病院にお願いするという病診連携もあります。普段は診療所に通院し、年1回は病院で診察を受ける方法も推奨されています。このように病院と診療所がチームになってより多くの患者さんに必要な治療を効率的に行い、糖尿病合併症の進行を地域全体で抑える事が病診連携の目的です。糖尿病は特に患者数が多いため、日本医師会、日本糖尿病協会、日本糖尿病学会が協力し合って「病診連携」を推進しています。

病院や診療所を変わる際には、検査値(血糖値、HbA1c、体重、血圧、中性脂肪、コレステロールなど)の経過や治療内容(お薬など)を書いた診療計画表が渡されます。これは患者さんの状態を、病院と診療所が正確に把握するために必要な情報なので、紹介先の先生にお渡しします。また、患者さんご自身が持っている「糖尿病手帳」も役に立ちます。

病診連携のメリット

通院中の病院の主治医から、診療所への転院を勧められた方は、「もう今までの病院に行くこと

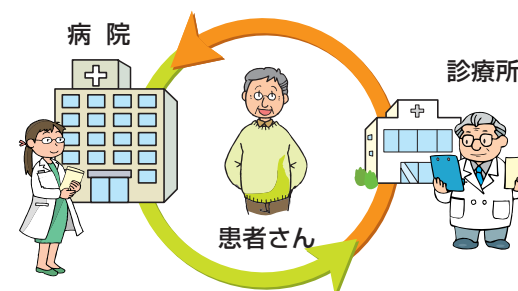
はできなくなる」、「信頼していた先生に診てもらえなくなる」、と不安になるかも知れません。しかし、決してそういうことではありません。患者さんにとって2人(複数)の主治医がいることになるのです。近隣の診療所への通院は、患者さんにとってもメリットがあります。病院に比べて通院費や通院時間、待ち時間の短縮ができます。また、糖尿病だけでなく、風邪や小さな体調変化などを含めて総合的に診てもらうことが可能です。もし、糖尿病が急に悪くなったり、合併症が進行するなど、状況が大きく変化した場合には改めて連携病院への引き継ぎをしてもらえます。診療所への紹介は、病院での診療がひと段落し、治療経過もよいので病院をいったん「卒業」する時期になったという意味なのです。自信を持ってその後の治療を続けてください。

診療所の紹介希望

病院に通院中で、血糖コントロールが良好な方の中には、通院や待ち時間の負担を感じている方がいらっしゃるかもしれません。近隣の診療所への紹介を、患者さんから主治医に相談することも可能です。それは決して、失礼なことでも、迷惑なことでもありません。病院では患者さんのご希望に耳を傾け、通院可能で、連携しながら治療が続けられる診療所を紹介してくれます。このようにして生まれた空席は治療の機会を待っている次の患者さんにバトンタッチされます。

将来にむけて

あなたの地域の病診連携はどのような形で進んでいるのでしょうか。ぜひ、病診連携を活用して、より快適な通院や治療を実現して下さい。



ここ来ると気持ちが和む。 気持ちを汲んで診てくれる先生がいる。

宮下さん◆先生、私は診察の時、いつも朝一番でしょう。実は、この病院の朝の雰囲気がとても好きなんですよ。

山田先生●えっ、朝??

◆8時半に先生が患者さんに向かって「おはようございます！」って挨拶するでしょ。それに続いてスタッフの皆さんが、明るく、ハモリながら「おはようございます！」って3回(笑)。これが気持ちいいんですよ。ああ、一日が始まるんだな。今日も頑張らなくちゃって、とてもすがすがしい気分になるんですよ。

●そうでしたか。そう言っただけとうれしいですね。

宮下さんとは10年以上のお付き合いだけど、そんな話は今日初めて聞きましたよ(笑)。

◆それから、廊下にかけてある詩と絵。さりげなくて、ほのぼのとして。これがまたいいんですよ。そう、気持ちを落ち着かせてくれるんです。毎月楽しみにしています。



●妻が描いているんですがね、喜びますよ。毎月見ていてくれたんですね。ありがとう。

◆私はね、持論なんですけど、糖尿病は合併症が出ない限り、精神的な病気なのかなと思います。

自分の糖尿病と共に生きることが大切。
つかず離れず、私も一緒に見守ります。



山田 憲一 先生
山田憲一内科医院 院長

東北大学医学部臨床准教授、日本糖尿病学会学術評議員、日本糖尿病学会糖尿病専門医

患者さんは、糖尿病について「わからないこと」がある。その「わからないこと」は何だろう? ということを常に意識して、患者さんと接するように心がけている。患者さんはそれぞれの思いがあり、そのうえで糖尿病に対峙しているのだから、型どおりの診察では対処できない。それぞれの思いを大切に診察することがモットーである。そのため、患者さんの何気ない一言を拾いあげることができ、医師でありたいと語る。やさしいまなざしが心に残る、みちのくの先生。



宮下 新作 さん

1型糖尿病。叔父叔母全員が糖尿病の上、父親を糖尿病から心筋梗塞で失った経験があり、自身が糖尿病と診断された時は、非常にショックを受ける。早く糖尿病を治したいという思いが強く、休日には10キロ以上の山歩きや民間薬などを試してみたが、思うように効果が出なかった。そんな時、友人から糖尿病治療に力を入れている山田先生の評判を聞き、12年前から通院を始める。現在はインスリンで治療し、合併症もなく経過良好。飄々とした笑顔と内に秘めた闘志を持つ磯の太公望。

この病院は落ち着かせてくれる。それが一番の治療になっている気がします。気持ちが和むというか、精神的にサポートしてくれる。何気ない声掛けもうれしいですね。

●宮下さんはとても真面目に糖尿病と接していると思うんですよ。通院し始めた頃には大きな胃潰瘍があって、言葉でも「大変だ」っていうけど、ちゃんと深刻さもわかっていらっしやる。それなのに、私たちに対しては笑顔で接して。なかなかできないことです。そう

この姿勢が「私の先生」という実感です。
私の目線で話をして、聞いてくれる。

いう微妙な心遣いと心構えを持っていることは、すごいことだと思いますよ。

◆そうですね、何だか気恥ずかしいですよ。糖尿病との付き合いも20数年になります。何しろ合併症を防がないと、これからの一生を左右しますからね。いろいろ民間療法もやってみたけど、効かない(笑)。ほんとに、もっと早く先生に会っていたら、糖尿病をこじらせずに済んだかなと思いますよ(笑)。

●迷ったり、悩んだりしながら、いろいろな努力をされたのですね。宮下さんは多くは語らないけど、ちょっとした一言の中に、その経緯や思いが詰まっているように感じますよ。

◆実際、インスリンには頼らざるを得ないけど、やっぱりインスリンに勝るものはないですね。使い勝手のいいインスリンといっしょに、糖尿病と付き合っていくのが一番だと実感しています。今は食事の直前に打てるし、便利になりましたね。

●もっと使い勝手のいいインスリン。まだまだこれからも出てくるかもしれませんよ。

◆そうですね。そういうのを楽しみに待ちながら、治療を続けていくのもいいですね。先生といっしょなら、安心して、これからも治療が続けられると思います。

●今までと変わらず、楽しく、ユーモアを持って、肩に力が入らない治療を続けていきましょう。これからも、スタッフみんなで応援していきますからね。